

西川一三「秘境西域八年の潜行」を描いた沢木耕太郎「天路の旅人」

(その5) シリーズ最終

八柳 修之

帰国 それからの西川

故郷の地福に帰ると両親は老いたが健在だった。故郷に着いて間もなく GHQ から呼び出し状があった。

7月、東京に着いた西川は、まず外務省へ挨拶に行ったが門前払いも同然だった。その足で GHQ が接収していた郵船ビルへ向かった。そこには参謀第二部、通称 G2 の情報担当部局であった。朝鮮戦争が勃発する2週間前、米軍は西川の持っている情報が知りたかったからである。翌日から市ヶ谷の宿舎に宿泊し、午前9時から午後4時まで、日系二世の係官に調書を取られるという日々が続いた。一日につき 1,000 円の日当が支払われた。当時、大卒の会社員の初任給が 3,500 円位であったから破格の日当であった。西川は密かに話したことのメモをとっておいた。

帰国してから1年が過ぎた7月、GHQ の聞き取り調査が終わった。それから実家に戻ったが、長居せず東京に戻った。それからというもの、興亜義塾の同期生だった内川源司の下宿に転がり込み、自分の経験した8年の事を書き始めた。完成まで3年かかった。出版しようとしたが、3,200 枚の枚数が膨大すぎ、なかなか引き受けてくれる出版社がなかった。西川は真生活協同組合の桜沢という男と知りあった。ここで組合本部の診療所に出入りする石川ふさ子と知り合う。のちの西川の妻となる人である。やがて、ふさ子は西川の手紙を清書するようになった。そして、組合の出入りしていた岩手の水沢で美容室や理髪店を相手に商売をしている小さな商事会社の社長から、うちの会社で働かないかと声をかけられた。そして西川はふさ子にプロポーズし一緒に水沢に行くことになった。岩手の水沢は二人にとって初めて聞く土地であった。1958年(昭和33年)7月、婚姻届けを出し、翌年の秋には一人娘の由紀が生まれた。

水沢で暮らして一年後、拡販のため盛岡に店を出すことになり、西川がその営業所の責任者となった。

同じころ、木村は毎日新聞から「チベット潜行10年」を出版した。西川の手紙は相変わらず、枚数が多いということで出版を引き受けてくれるところはなかった。1969年(昭和41年)になって芙蓉書房の社長、上法快男から手紙があり出版したいというという。上法は元陸軍の主計少佐で戦史、伝記などを積極的に出版していた。



そして、1996年(昭和42)、「秘境西域八年の潜行」(上巻)が出版された。出版後の反響は驚くほどで、朝日、毎日、読売各紙、作家、学者、冒険家などから賛辞が送られた。ただ、ちょっとした有名人になったことで、商事会社の社長は会社を乗っ取られるのではないかと西川を頭首にしてしまった。困った西川は他に仕事が無かったので独立することにした。名前は盛岡から見える岩手山に次ぐ名峰、姫神山からヒントを貰い「姫髪」と名付け店を出した。最初は前社長から嫌がらせを受けたが、これまでの西川の人柄から取引先が増えていった。

それから西川は9時に店を開け午後5時には店を閉め、家に帰る途中、居酒屋に寄り好きな酒を銚子で二本飲む。つまみはほとんど食べない。7時半までには帰宅し夕食を食べるという毎日。正月元旦以外364日、こういう生活を続けた。マスコミなどから取材を受けたが、5時以降なら会ってもよし、誰にでも会った。なかにはTV局から現地取材のオフアもあったが、すべて断った。娘の由紀は西川が黙々と364日働く父親の姿を最後まで見ていた。

一方、木村のその後は西川とは真逆だった。木村は CIA（中央情報局）に採用され、アメリカ大使館で海外放送を聴取し英語で要点を書くという諜報の仕事を 26 年間続け、1976 年（昭和 52 年）に退職。それまで非常勤講師をしていた亜細亜大学でモンゴルの教授となった。モンゴル関係の仕事に携わり 1989 年（平成元）10 月、亡くなった。67 歳だった。



左の写真は興亜義塾の OB 会での木村（中央）と西川（後列右）西川を除き全員背広姿。西川は 180 cm を超える大男、木村は小男であった。木村は西川より一期上、年齢は西川が 3 歳年上。

西川は 85 歳までは元気そのものだったという。2003 年（平成 15 年）副鼻腔癌を手術して以降、衰え、2008 年 2 月、89 歳で亡くなった。2017 年（平成 29 年）、妻のふさ子が亡くなった。

沢木は西川一三の旅も長かったが、その彼を描こうとする私の旅も長かった。彼に会ったことを発端とすれば、発端から 25 年かかったことになる。コロナの状況が好転したら、なんとしても中国の内モンからインドまでの旅をしてみたいと思っている。その時、私の「天路の旅人」は、いちおうの完結を見ることになるはずだ。

と「天路の旅人」の著は終わっている。

沢木の次なる本の出版を大いに期待したい。その本が出版されるまで、私はしこしこ毎日歩き続け元気でいたい。（完）



盛岡 開運橋の袂にホテルがある。



盛岡から見る姫神山

ここで、沢木は 25 年前、西川と会って以来、約 2 年間、盛岡に通い取材、以後中断、西川の死を知って以来、遺族と交流を通じて、「天路の旅人」を書き上げた。

参考図書など

「秘境西域八年の潜行」（上・下） 西川一三 芙蓉書房

「西藏漂白 チベットに見せられた十人の日本人」（上・下） 江本嘉伸 山と溪谷社

西川一三の歩いたルート、距離、足跡を地図で示した人がいます。中村利和さんという方のウェブサイトがあります。地名、戸数、廟名、方角や距離、海拔高度、山や川の位置など克明に書かれています。

インターネットと地図上で特定してみると驚くほど一致しているとのこと。